

共に生き、共に育つために

私立聖マリア女学院中学校 3年

野口 真秀

私はインクルーシブ教育のあり方について話をします。まず私はインクルーシブ教育に賛成です。なぜなら、学生の中に障がいの有無や国籍にかかわらず、様々な立場の人と接することは差別や偏見を無くし、お互いに助け合うことを学ぶうえで大切だと思うからです。しかし、それは環境を整えないと成功しないと思います。

私は海外と日本の小学校の両方に通いました。そこで、インクルーシブ教育について海外と日本では大きな差があると感じました。その差とはインクルーシブ教育は大人が環境を整える必要があると理解しているかしていないかです。私が住んでいた国では加配の必要な子にはヘルパーさんや先生と一緒に居て指導しており、障がいなどのハンデの有無に関係なく、学級全員が公平に学び指導してもらえる環境でした。ハンデのない生徒は自分の活動にゆとりを持って自発的にお手伝いをしたり、しなかつたりを選択できます。

一方日本では、環境整備が進んでおらず、同じ学級の生徒がサポートに回る人が多いです。特に、どうしても隣の席や同じ班の生徒にサポートをまかせがちになることが多いと感じます。それが行き過ぎると、自発的にサポートにまわっていた生徒たちが負担を感じるようになり、結果的に共に苦手を補い合うという目的が達成できなくなる心配が出てきます。

近年では、ヤングケアラーも社会的に問題視されています。先の話とも共通するのは特定の人にサポートの負担が偏っていることだと思います。支えたくても、助けたくても、一人でできることには限りがあります。だからこそ、社会みんなで支え合える環境、仕組みを整える必要があるのです。そこで初めて安心して「手伝って」や「助けて」を気楽に言えるようになり、「手伝おうか」、「大丈夫？」を気楽に言えるようになるのではないのでしょうか？

学校のインクルーシブ教育に話を戻します。学校ではぜひできるだけ多くのインクルーシブサポーターを導入して欲しいと思います。インクルーシブサポーターとは、障がいの有無や国籍にかかわらず、すべての生徒の学習や必要な支援をサポートする人のことです。例えば、授業中にわからないことがあったとき、インクルーシブサポーターに聞くことで授業を止めて先生に質問したり、友達に聞いたりせずすみませす。これにより、みんなが自分のペースで授業を受けることができます。

また、主要科目だけでなく、実技の授業でもインクルーシブサポーターがいれば安心です。例えば、ミシンや工具など危険な道具を使うとき、先生1人では全ての生徒に目が行き届かず不安が残ります。しかし、インクルーシブサポーターがいればその不安も減ります。私が通っていた小学校では6年生からインクルーシブサポーターが導入されるようになりました。サポーターの多くは保護者の方で、皆さんが得意なことを活かして数人のチームを組んで無理なくサポートをしていました。私の母も英語とミシンのサポーターに登録していて参加できる日だけサポーターとしてお手伝いをしていました。できることをできる分だけの仕組みと環境が整っているので負担に思うことが無かったと感じたそうです。

しかし、保護者の方々だけでは限界があります。よりたくさんの人になってもらえるように、広報で募集をアナウンスしたり、地域コミュニティに依頼したりすることができれば、よりインクルーシブサポーターを増やせると思います。

私の経験から、インクルーシブサポーターがいることで全ての生徒が自分のペースで安心して授業が受けられると感じました。障がいを持つ子も持たない子も、日本語が話せない子も日本語を話す子も同じように授業が受けられるようにしてサポーターとのかかわりを見ることで、教え合う、助け合うとはどういうことか、どのように声をかければ良いかを学ぶことができます。

そうすれば、私のようにインクルーシブで教育を受けて良かったと思え、また助けてもらった、教えてもらった経験から自分もサポーターになりたい、人を助けたいと思う子が増えてインクルーシブで教育はより充実し、差別や偏見無く自然に様々な立場の人と接することができるようになると思います。全ての生徒が、共に生き、共に育つために、環境の整ったインクルーシブ教育が広がることを願います。